黙って見守る愛のまなざし

中国の古典中の古典であり、かつわが国で最も尊重されている古典“論語”は、「学んで時にこれを習う。また悦ばしからずや」という孔子の言葉で始まっています。これが“学習”という言葉の語源です。

“学ぶ”とは、一般に、先生や書物から新しい知識を獲得することを言いますが、“まなぶ”であり、それは“まね（真似）る”の古語でもあります。つまり、“まなぶ”とは“まねる”ことであり、手本とする立派な人の言葉や行為を真似ることが“学”ということなのです。

幼児は、この“真似”をすることが大好きであり、また実に上手でもあります。だから、「幼児ほど“学ぶ”ことが好きで、かつ上手な者はない」と言うことが出来ると思います。そのお蔭で、幼児は日に月に向上して行くことが出来るわけです。

さて“習う”ということは、“慣れる”の古語である“慣る”という言葉の変化（延音）したものですから、実は“慣れる”ということと同じことなのです。昔から「習うよりも慣れろ」という諺がよく使われていますが、ほんとは“慣れる”ことが“習う”ことなのです。

立派な人の言行を真似、その真似をくり返しくり返しやって、生まれつきそうであったと思われるような状態になるまで“慣れる”ことを“習う”というのです。

だから、昔の人はこのことを「習い性となる」と言ったものです。また、“習”と“慣”とをくっつけて“習慣”という言葉を作り、「習慣は第二の天性なり」とも言いました。

前項で述べましたように、幼児は“くり返し”が大好きで、大人だったらとても苦痛でたまらないような“くり返し（練習）”を、幼児は喜んで飽きずにやります。だから、“学ぶ”ことと同様、“習う”ことにおいても、「幼児ほど“習う”ことが好きな者はない」と言うことが出来ます。

幼児は生まれつきの学習好き

つまり、“学習”という言葉は幼児のために作られたようなむので、人間の一生のうちで、幼児期ほど、“学習”好きな時期はない、ということが出来ると思います。

このように、幼児はだれでも学習好きに生まれついているのですから、黙ってただ暖かい目で見守っていさえすれば、それだけでうまく行くはずなのに、わきから親が余計な口出しをして、子供のやる気を

そいでいる、というのが遺憾ながら実情です。以前に取り上げたことがありますが、このことを“助長”と言って、親の最も陥り易い弱点です。“助長”は親の自己満足に過ぎず、事実は子供をそこねるだけの行為ですから、くれぐれも御注意が肝要です。「親の言う言葉で最も嫌な言葉は何か」を調査したことがありますが、その第一に、「勉強しようと思っている時に“勉強しなさい”と言われること」が挙げられています。正に「“言わぬ”は“言う”にまさる」です。

助長の害は“ほったらかし”よりも悪いものがありますが、ほったらかしは親の権利も責任も放棄するものであって、断じてあってはならない行為です。

助長には親の情が満ちていますから、子供をそこねる害はあるものの、子供は親の情にふれて人情を心に育くみます。ほったらかしには親の情が全くありませんから、子供を人情のない子供にする恐れがあります。

戦後、助長の害を説く余り、“放任”を良しとする風潮が生じ、そのため子供をほったらかしにする親が少なくありません。この頃、考えられないような非道な事件が新聞を賑わせていますが、その原因はここにあると私は思っています。

暖かい親心が子供の人情を育むのです。「目は口ほどに物を言い」の譬え通り、黙って見守る暖かいまなざしが、子供の心を明るくし安定させ、人間らしい心遣いを育てることを可能にするのです。

さて、子供は“学習”好きの上に、失敗しても挫けない強切な精神をもっていることを指摘したいと思います。歩き始めた赤ちゃんを見て下さい。いくら転んでも決して諦めずに立ち上がり、遂に必ず歩くことを可能にします。

親は子供のこの天性を信頼し、言わでもがなの言葉を慎しみ、助長せず、黙って暖かい目で見守っていればよいのです。子供は必ずだれでも、親を驚かすような能力を発揮させるものです。

その時は、すかさず感嘆の言葉を送ってやるのがよろしい。親の感嘆の言葉ほど子供の心を満足させ、さらに一層の向上心を湧き立たせるものはありません。それには常に見守っていることがどうしても必要です。

子供も時には自信を失う事があります。その時は、「きっとお前なら出来るよ」と確信をもって励ましてやることが必要です。親のその一言が子供を勇気づけて成功に導きます。